

岡の百村川の岸で唯一株であるが♀本の野生が発見された。筆者は同氏の案内で再三同地を訪れ、親しく観察することが出来た。習性と枝、葉、冬芽の形質はよく♂本に合致する。筆者は♂本の示す諸形質により、このヤナギをヤマネコヤナギ *Salix Bakko* Kimura とネコヤナギ *Salix gracilistyla* Miquel の雑種としてきたが、今回の♀本の研究により、更にこの考えが正しいと思うようになった。苞、腺体、子房の形と大きさは両種の間型型といえることができる。また子房の柄と花柱の長さは正しく中間である。しかし柱頭の形状はむしろヤマネコヤナギを想わす。一つの胎座における胚珠の数は大体 6 個であるが、これも両親の中間といえる。ヤマネコヤナギでは普通 8-10 個、ネコヤナギでは 3-4 個である。♂本と同様裸材の隆起線はヤマネコヤナギから、葉の上面の気孔と第 2 次側脈が平行且つ密なことはネコヤナギから来たものと解したい。

□Côté W. A. (ed.): **Biomass utilization**. 730 pp. 1983. Plenum Press, New York. \$95. 1982 年秋にポルトガルで開かれた生物資源の利用に関する NATO (北大西洋条約機構) シンポジウムの報告書である。シンポジウムには NATO 加盟国を中心に約 80 人の研究者が参加し、15 の基調講演と、各々の講演に関連したテーマの一般講演が行われた。本報告書には 40 篇の論文が収録されている。最初の 3 篇は生物資源の利用に当たっての基本的な考え方に関するもので、1. エネルギーとしての生物資源 (現在と未来の燃料)、2. 生物資源からの食糧、化学肥料・農薬、エネルギーの確保、3. 人口増加にとまなう新しい生物資源の開発と利用である。各論は 5 部で構成されていて、1. 原材料とその利用法 (12 篇)、2. 生物資源の特性と化学組成 (3 篇)、3. 生物資源の生物学的利用法 (9 篇)、4. 生物資源の熱化学的利用法 (5 篇)、5. 生物資源利用における工学・経済学的問題 (8 篇)。生物資源としては、森林、農産物、水産物、都市廃棄物、その他の未利用生物資源について、それぞれ専門家が利用の可能性のある資源を提案し、中には詳細な資源量推定を行なっているものもある。また現在利用されているものについてはその例が紹介されている。生物資源確保のための効果的な培養・栽培法については、樹木および単細胞藻類などがとりあげられている。生物および熱化学的変換利用では、生物作用や熱化学反応によって、食糧や有用ガスなどを得るいろいろな方法と、効率や技術的な問題点が提示されている。最後の工学および経済学的問題では、生物資源を大規模に利用したときの利点や問題点が検討されている。

現在の日本の食糧とエネルギー両者の充足率は世界最下位にあることが基調講演の中に示されている。日本人である我々は再利用の効く生物資源のより積極的な利用について真剣にとり組まねばならないことを改めて痛感させられる。生物学研究者の一読の価値がある。

(高橋正征)